

## 忘れない思い出

私は看護過程基礎実習で患者 A 氏を受け持った。A 氏を受け持った期間は、今まで私が患者を受け持った期間の中で一番長い期間であった。私はこの実習で初めて関連図と看護計画を作成した。初めて行うことばかりで緊張していた私を、明るい言葉で楽しませてくださったのが A 氏であった。A 氏の病室への訪室を重ね、何度もコミュニケーションをしていくうちに A 氏のお茶目な性格と穏やかな雰囲気を知ることができた。A 氏は認知症を患っており、毎日必ず同じ話をしてきた。A 氏は私が今まで受け持った患者の中で、一番印象的な方となった。なぜなら、私は A 氏に A 氏と同じ認知症を患っている祖母を重ねていたからである。

私の祖母はアルツハイマー型認知症の診断を受けてから 5 年以上は経過している。私は幼いころから祖父母の家でお世話になることが多く、祖母との関わりはとても多かった。祖母に起こった異変は、料理で砂糖と塩を間違えるようになったことから始まった。私は今まで何度も食べてきた祖母の料理を今までのように食べられなくなったことがとてもショックだった。その後も祖母は通帳を誰かにとられたと騒いだり、他の都道府県まで歩いて家からいなくなってしまう、家族で捜索したりした。私はどんどん変わっていく祖母を受け入れることがとてもつらく、以前の祖母にはもう会えないのだと胸が痛かった。幼少期の祖母との思い出が今でも多く思い出され、その頃の祖母に会いたいと強く思う。私は、変わっていく祖母をどうしても受け入れられず、祖母と会うことを自然と控えるようになってしまっていた。認知症の症状によりいつもどこか不安そうで、笑顔でいることが減ってしまった祖母を見ているのがとても辛かったのだ。そうして月日が経ち、私は看護学生となり看護過程基礎実習で祖母と同じ認知症の A 氏を受け持った。A 氏はいつも明るく、冗談を言ったり姉妹の話をしたりしてくださった。特に姉妹の話をよくされていて、子どもの頃の楽しい思い出を毎日話してくださった。

私は、A 氏と関わったことで、認知症に対するイメージが大きく変わった。私は A 氏と出会う前までは認知症に対してマイナスなイメージを持っていた。これは、私が認知症のマイナスな部分にばかり目を向けてしまっていたからなのだと気づくことができた。私が祖母と A 氏と関わって感じたことは、昔の楽しい思い出は認知症の患者にとって自分を幸せな気持ちにしてくれるものであるということだ。認知症は、患者も周りの家族も苦勞して悩みながら対応していく疾患であると思う。忘れない幸せな思い出を患者と語り合い、認知症を患っていても毎日を楽しく過ごしていけるような看護をしていきたいと思う。